

「よろしく願います。講評会では、司会進行という、ご意見を出しにくい立場に入られたかと思うので、ぜひ具体的に作品についてお話もお聞かせいただきたいと考えています。」

そうね、僕は卒業設計はすごく重要だと思っているんですけど、その重要さは一人一人にとってということと逆に言うと、順番、順位っていうのはそれほど重要ではない。大学における自分の考えをまとめていくことが一番重要なことだと思う。なので、一人ひとりが、チャレンジできているかどうか、自分にとって大きなテーマを発見できているかのほうが大事だろうと捉えています。

法律を作る建築

そういう意味で、瀬川さんのプロジェクトは、印象深かったですね。講評会でいい批評も貰えた。立衛さんから「瀬川さんのプロジェクトは、法律を作る、ということだ」というのはすごく面白かった。卒業設計の一つの目標として社会や都市の次の姿を言うというのがあると思いますが、そうだとすると、建築とともに法律をつくるというのは、すごく自然で、大事なアプローチだと思います。

建築の提案がそのまま社会の秩序、真似したいものになって、それが法律になっちゃうっていうような感覚は、みんなで継続的に議論した方がいいんじゃないかなと思います。卒業設計について、今回本をつくるのであれば、本の中でもいいかもしれないし、議論の場をつくるのもいいかもしれないので、「法律をつくる」ということはどういうことなのか、これだけわかりやすい例があれば、みんなも自分の言葉で話せるんじゃないかな。とにかく、そのような議論を導いたということだけでも、素晴らしいですね。

03 藤原 徹平

『ロードサイド商業が街を守る』 P.10
瀬川 未来

パースペクティブと神話

藤井さんのプロジェクトは、こちらも良い卒業設計だったとおもいました。中間講評の議論で方向性を変えなかったのがよかったとおもいます。アドパースに沿って変えていく方向もあったとおもいますが、ブレなかったことで、自分が昇るべき山の形が見えてきた感じがする。その言語化作業が残っている段階だと思います。藤井さんのテーマの中心が、「雪景色」みたいな風景の問題だとは僕は思わない。阪根さんの講評のときに、立衛さんがちょっと言っていたんですけど、新しいパースペクティブ、つまり新しい視野っていうのかな。そういうものを探ろうとしているんだと思いますね。真鶴だったら、馬蹄形の半島があって、その半島で生きている感覚、そういうことを実感する視野の在り方がある。それは個別の通りや人間の活動とは違う、もっとおっきな存在ですって言うことが言えたらすごく面白いところまでたどり着けるように思います。

そうした考え方というのは、構造主義的とも言える。構造主義では、地域の神話に見出す構造性と、文学や芸術の構造性の類似性からものを思考したりする。神話を読み解いていくと、根柢のパースペクティブっていうのがあるわけ。日本書記とかの神話だったら、富士山があってその深い穴の先に黄泉の国があって、火傷して大怪我して、逃げ帰ってくるっていうような、神話の中にも上下とか手前とかこちら側とか世界の秩序がある。それは日本の風土や暮らしと連動していく大きな構造でもある。火山や地震があることでそもそも大地や川があって、人は恵みをうけるのだけど、時に大きな被害にあう。火の国で生きていることの、苦しみと悲しみと喜びとかが、同時にパースペクティブに物語として書かれているっていうふうに、神話的な構造は、人々の思考の深いところに入り込んでいて、文学研究などを考えるとそういう感覚が身につく。

だから藤井さんの、川に沿って、長くつづく谷があって、そこに土手があって、その土手は土木が作ったものなんだけど、そのことによって、谷で生きているというパースペクティブがより鮮やかに浮かび上がってくるっていう話は、新しい神話的なものでもあるかなって思いました。ここは土木構造物がないと、生きられない。そういうような骨太なことを含む、と思いますね。

瀬川さんみたいに、土木的な価値、経済的な価値を、転換していくプロセスも街の作られ方が変わっていったって大きい問題だと思うんだけど、そうじゃなくて土木や人間の営みをもっと神話的なパースペクティブに参加させていくこともすごい大きな問題なんだと思う。

これは文学や映画に置き換えてもいい話で、文学で郊外を扱うと、高速道路とかショッピングセンターとかを舞台に出さざるをえない。でもイオンモールとかが出てきたときの、文学的な強度の浅さたるや半端ないわけよ。イオンにいつて映画見てマック食ったみたいなこと書いてあったら、ほんとに文学として薄っぺらくなるといふか笑。だけど、それを書くべきだっていう考え方もあって、例えば阿部和重という作家はあえて書くわけ。山形の物語で、あえて、イオンモールでヤンキーが集まってチャチャ話しているっていうのも風景の一部でわざと入ってくるわけ。しかもそれを神話に重ねて、構成していくわけ、日本書紀の神話と、今の地方で起きている出来事と、あとアメリカ映画を重ねて、そこに新しい物語を作ろうとして苦労して。どれもすごいおもしろい。ハリウッドだったら、クエンティン・タラントとかもそう。藤井さんは、もしかしたら将来そういうようなものを考えられるような人になるかもしれないという期待もしています。現実と現実じゃないことが混ざりジャンプしていく、っていうのが神話的構造物を見ることが面白さだから、神話世界においてこの谷っていうのがどういう存在で、谷底と山っていうのがどういう風に意味が位置付けられていて、神話的構造物と現代社会のアクティビティが重なっている、とかね。と、言うのは簡単なんだけど、そこから先は物語や神話や寓話への感受性というのが必要になってくるので、それもまたいろいろ感覚を深めていくしかない。まあこの踏ん張った経験は絶対いけるので、自分の建築の視野を広げるために、がんばって知的に脱線していいですね。

『その先の、雪景色』 P.120
藤井 雪乃

心くんのプロジェクトも文学と神話っていう意味で考えると面白いのかもしれないね。原宿にあるちっちゃな家が、世界を変えるっていうようなことはどうやって起るのか。小さな隠れ家みたいなものが世界を変えるっていうのはいったいどういう構造なのかっていうことを、文学なり何か別のメディアで、もう一度、きちんと構造化できていれば、より面白い建築プロジェクトになるんじゃないのかなという気はしますね。

たとえば、イスラム教とかだと、みんな家にお祈りする場所があって、ある時間になったら聖地の方を向いてお祈りするじゃない。あれって要するに、お寺が重要なのではなくて、どんな場所でも大事な場所になるっていうことだから、ちっちゃくてもいいわけだね。ちっちゃくても聖地に繋がる場所みたいなものが宗教空間だとどうなるのだろうかとか、文学においてそういう物語の構造になるのかっていうのを考えていくだけでも、みんなとしてはおもしろい。そういう小さな空間と人間の関係を集めてきて、小さな逸話の集合として建築を考えてみるのも面白いんだと思います。

建築を作るのは人間

― 様々な学年を見てこられた藤原さんから見て、この学年全体に対しては思うことはありますか。

学年ですか。学年というまとまりの人格は、僕はあんまり考えたことはないですね。

― 時代的な目線ではどうですか。

時代というような考え方もあんまり持たないかな。あくまで歴史と個人がどうつながるかが重要。一人ひとりがどのように歴史と自分がつながるかを、自分で決めなきゃいけない。僕は決められない。それぞれの人の歴史観、価値観、興味というのがあって、その歴史観の中でそれぞれ自分の倫理っていうのが立ち上がるから、歴史観なしに卒業設計はできないとも言える。

― 生まれてきてから今までに培われたものもあるし、大学で培われたものもあると思います。

あるよね。

僕は大学に入ってきた学生に何かをしてあげることができるけど、大学に来るまでの時間は変えられない。できる限りいろんな言葉をかけて、眠ってる個人の倫理とか個人の歴史観っていうのを刺激するしか教育者としてはできない。それは、やれる限りはやってきてるつもりなのだけ。それに反応してくれる人もいるし、意図的に反応を避ける人もいるし、それは色々だけど、最後まで設計やりたいていつて卒業設計まで残ってくれた人は、多分、僕からの投げかけに何かしら反応してきた人であるのかなと思う。その成熟具合っていうのは、違う。まだ十分に現れていない人もいるし、結構もう現れてきている人も少し言語化していけばさらにいいなっていう人もいるし、その度合いは色々だとは思いますが。卒業設計にとどまらずそうした個性はさらに深めてほしいなと思うわけ。

例えば僕とかはどんな個性かというのと、わかりやすく言うと、敷地変えたいとか、プログラムを変えたいといつも考えちゃうわけ。コンペに勝った後に、クライアントに敷地って変えられないんですか、とかプログラム変えたいんですが、とつい聞いちゃうわけ。え、って驚かれるんだけど、たまに確かに変えた方がよいかもみたいになる。こいつ何言ってるんだ感じになる時もあるけど、隈事務所の担当者のときからいつもそうした姿勢は変わらない。でも実は、それはそもそも僕の修士論文や卒業設計から継続したテーマでもある。そういった個性は学生時代にしか深めていくことはできないんだと思うんです。

― 最後に、これから様々な方向に進む私たちですが、みんなに何かアドバイスなどありますか。この流れで全体に通しての話題をお伺いするのもあれですけど。

一人ひとりの人生があるからね。共通したアドバイスというのは難しいかな。

― ですよね。

でも一人ひとりにはいくらでもアドバイスするから、いつでも相談に来てね。

― そうですね、それが一番ですね。

皆さんが伸びていく選択肢は無数にあるんだと思う。僕が提供できる学びの場でも学部と大学院では教え方は全然違うし、また YGSA でのスタジオと僕の事務所での協働作業のやり方は全然違う。前者は放し飼いだけど、後者はもつと一緒にバンドやろうぜみたいな感じだし。横国は研究室制度じゃないから、僕の場合は事務所がだんだん研究室的になっていつていっている。またそれ以外にもドリフターズ・インターナショナルという組織でも学びの場をつくっている。そうした場のどれとみんなの相性がいいのかはわからないし、あるいはそんなことと関係なく、自分勝手に世界を旅することでもわかることもあるだろうし。皆でバンドやるみたいに建築やることで伸びていく人もいると思う。自由自在に、それぞれ自分の中で使い分けて、自分の中の建築を広げればいいんじゃないのかな、て思いますね。特に卒業設計をやった後は、すごく伸びるから、豊かな経験の時間をもって欲しいな。と思いますね。他に何かある？ 大丈夫？

― 大丈夫です。お忙しいところありがとうございました。

はい。では、みなさん。よい青春を。

― 笑笑。

藤原徹平

1975 横浜生まれ
2001 横浜国立大学大学院修了
2001～2012 隈研吾建築都市建築設計事務所勤務
同事務所設計室長、パートナーを経て退社
2009～ フジワラテッペイアーキテクツラボ主宰
2010～ NPO 法人ドリフターズインターナショナル理事
2012～ 横浜国立大学大学院 Y-GSA 准教授